

入門講座

－おなじみの那須英彰氏と一緒に歴史調査を楽しもう－

講師：那須英彰／司会：青山直幹／記録：青山直幹

①参加者の情報提供

②家系について

③明治時代以前のろうあ者の様子

④調査方法と心得



①参加者の情報提供

(奈良) 家系図によると、主人の先祖は天智天皇（38代・626～671）につながっているようです。

(栃木) 日光の東照宮にある「三猿」を彫った人はろうあ者？

原画が彫刻か不明だが、本当にろうあ者が創ったことが判明すればどんなにすごيدらうか。

(岐阜) 江戸時代に刀剣を作った人にろうあ者がいた？

刀に「聾」が刻んでいるのがある。

・「摂州住藤原聾長綱」……江戸時代初期（大阪）

・「雲藩士 高橋聾司長信」…江戸時代末期（鳥根）

刀を作ったろうあ者は、生まれつき聾か失聴者か？それは、ともかくろうあ者でも刀を作ったことが事実であれば、かなりの高度技術をもったろうあ者だったろう。私自身、刀に興味を持っている。上の刀について東京の刀関係団体に問い合わせた。これから、本などで情報を集めてさらに調査を極めたい。

(広島) 昔、広島県三原市の「瀬戸田島」はろうあ者ばかりの島だった？

なぜ、ろうあ者だけの島だったのか？コミュニケーション手段はどういうものだったのか？

②家系について

・家系図を持つと、祖先を調べることができる。昔は家系図を持ったのは、経済的に恵まれた家々あるいは身分の高い所帯に多く見られた。

・家系図は巻物が多く、和紙がのりで貼り合わせていて古いほど和紙が古くなっているのがわかる。のりは「ごはん粒」をつぶして貼ったものだ。

・しかし、家系図は本物とにせものがある。本物そっくりのものもあるので、真偽の区別がつかないことがある。

・家系図は、家の将来、家柄などを問われる貴重なものとして重宝されていた。

・家に災い、縁起の悪い過去があると、縁談などに恵まれないことがあったようだ。

・特に部落出身は自分を守るため、部落を隠べいするためにお寺のお坊さんに家系図を作ってもらった例もあったようだ。

・故人S氏（ろうあ者）の家系……「30代敏達（びたつ）天皇の帝（みかど）」

③明治時代以前のろうあ者の様子

1. 51代嵯峨天皇の子孫にろうあ者がいた？

50人の子供をもうけたが、その中にろうあ者と思われる節があるが、いくら調べても今のとこ

ろ調査不能に近い状況にある。

子供の名前はほとんど「源」がついているが、一人だけ「源」ではなく「淳王」になっているので、どうも引かかる。

子供が成人になると成人式を迎えたが、肝心の「淳王」だけ記録なし。また、「淳王」に子孫がないのでますます疑いたくなる。

「今境」の本に「志賀のみぞき……」があるが「みぞき」の意味がまだ分からない。さらに読むと、「外出せず、いごもり、勉学に励む、秀才になる」という風になっているのが分かるが、果たしてろうあ者を指すものだろうか。

盲人は目が見えないから本を読むことは不可能だから盲人は考えられない。

ろうあ者は言葉が言えないから外の人とはコミュニケーションがうまくはかどれないことを考えれば「いごもり」は当てはまる。それなら、「淳王」はろうあ者と考えても不自然ではないか。

2. 「聾（つんぼ）の笠印」（江戸時代）

十辺舎一九が庶民の生活ぶりを書きまとめた「東海道中……」の本に「聾の笠印」が登場している。

ろうあ者がかぶる笠に「聾」を書き立てて「自分はろうあ者です」を表現したもの。これまで、ろうあ者は役立たず者として乞食あるいは間引きによる悲劇が多く聞かれるが、この本を見る限り、ろうあ者でも普通に人と変わりなく旅行を許されたことが分かる。必ずしもすべてのろうあ者が乞食だったとは限らないといえよう。

別の意味に、本当は健聴者なのに切られるのを恐れて「聾」と書いた笠をかぶって自分を守ったものもある。

すなわち、その時代は「ろうあ者を切ってはならない」とう決まりがあっただろうか？

3. 「聾札（つんぼふだ）」（江戸時代）

ろうあ乞食の胸に「聾」と書いた札を胸に掛けた事例もあったようだ。

聾札を掛けたのは、ろうあ者ばかりではなく健聴者も多くいたようだ。

その時の背景を考えると、ろうあ乞食が圧倒的に多くいたと考えられる。

4. 「聾」が登場する本

「和名沙」という本に「聾」がよく出る。

「日本霊異記」上巻の八に「聾」が登場する。

④調査方法と心得

1 「高聾山（たかつんぼやま）」

鳥取県にも鳥取市に問い合わせしても、高聾山を知らないという。地図を調べても、これらしい山は載っていない。それで「国土地理院」に確認した。これで間違いなく「高聾山」と判明した。早速、持ち主に聞くが、これまで「三角山」と呼んでいたそうだ。

なぜ、「高聾山」なのか。わざわざ「聾」を付けた山名になっているから、かなりの理由があるはずだ。由来を知りたく、山の近くに住む人に聞き込み始めた。まず得た情報は「山に向かって大声を出しても、こだまが返ってこないから“高聾山”と名づけられた」という。

あまりにこっけいな話だが、これでスンナリ納得できるものではない。ほかに色々な情報が入ってくるが、信用し難い憶測も多かった。まだ、はっきりした由来が分かっていない。

2 「時代の背景と人の結びつき」

例えば、奈良時代と平安時代にろうあ者はいたか？ろうあ者はどんな生活を営んでいたか？いずれもそれらしい資料や文献に乏しく、正しく把握できない。ただ、ろうあ者がいたと分か

っただけで十分で済むものではない。

まず、それぞれの時代の様子と背景を研究し、その背景と結びつけて想像することは重要である。

3 「資料の扱い方、伝承の変化などにおける注意点」

- ・ 調査するためには資料は必要になるが、扱い方にもマナーがある。
資料の乱用はダメ。資料の転売もダメ。資料の扱い方を心配するなら、提供先に問い合わせること。
- ・ 人に言われたことをすぐに信用するのは危険な場合がある。調査して一致したことが分かれば改めて信じてもいいことがある。伝承、口承に変化の場合があることも忘れてはならない。

4 「資料集め」

古本屋巡り（古本をさがす）

インターネット検索

図書館に行く

国会図書館……一般の図書館と違って入館条件が厳しい

人から情報を集める

昔の国語辞典を調べれば、つんぽに関する言葉がよく出てくる。しかし、時代とともに「つんぽ」などの用語が本や辞書から抹消されたり、地名なども「聾」「つんぽ」が消えてしまっている所が多いので、聾の歴史をつかむのに重要な背景が分からなくなっている。

江戸時代に存在したろうあ者あるいは中途失聴者の中に自分の名前をわざわざ「聾」を使った名前に改名する人が多く見られたように、昔は「聾」は「聾」であることを明確にするのが当たり前だったのだろうか。とりあえず、昔のろうあ者を知るには、わざわざ「聾」を消去するようなことは残念というほかにはない。

「聾」が消えていく分、手探りで調べ、さらに調べ、かなりの重労働を要することになるが、時代の背景と人の生活様式を連結して、ろうあ者の立場はどうなっていたかを想像しながら研究を極めなければならない。